



ベドウインのテントで明かした夜

リニューアルされた西アジア常設展には、ベドウイン（遊牧民）のテントが再現されている。その展示の準備をしながら、一五年ほど前にイスラエル南部ネゲブ地方にあるベングリオン大学のスデボケル・キャンパスで開催された、ベドウインの文化・歴史・言語に関する夏季講座に参加したこと思い出していた。

●ネゲブの砂漠研究所

講座が開かれたキャンパスは、テルアビブからバスで一時間ほど南に下ったベルシェバからさらにバスで一時間、ベドウインのテントが所々に立ち並ぶ以外ほとんど何も見当たらない荒野を南下したところに、まさにオアシスのように現れる。その敷地内にラウシユタイン砂漠研究所があり、イスラエルの領土の五〇パーセント以上をも占める砂漠地帯の有効利用のためのさまざまな研究がおこなわれていた。そのほとんどが理工学系であったが、その中で当時、唯一の人文社会系の研究ユニットであつた社会学センターがベドウイン夏期講座を主催した。このセンターはネゲブ地方に約八万人いるとされたベドウインの調査をおこなっていた。これは民族学や

言語学等の分野における成果をあげるためだけでなく、イスラエルの領土となつた地に生活するベドウインたちが抱える諸々の問題（土地の所有権、定住化、教育、医療等）の現状を調べるためにものでもあつた。ヒツジやラクダを連れて自由に移動してきた——イスラエル政府にとつては少々厄介な存在である——ベドウインを管理するために必要なデータを集めることで政治的な意図を持つていたようだ。

電気やガスを使わない冷房システムを導入した、まるで火星基地のような建物の中で講義がおこなわれ、週に一度はフィールドに出た。世界的な権威が集められた講師陣に学ぶ、大変恵まれた機会ではあつたのだが、週に一度だけの集団フィールドワークでは飽き足らず、キャンバスで知り合った人のつてで、個人的にベドウイン老夫婦のテントを訪れ、夜を過ごすこととした。

●原野を体験

もちろん電気などひかれているわけがない。老婆が焚き火で料理してくれたごつた煮は、暗くて中身が見えない。ほとんど手探りで、それを薄いパンといっしょに食べた後、お

茶がふるまわれた。口をつけたコップのふちに、かたい異物の感触があり、焚き火の明かりにかざして見るべく、なんと巨大なアリが。砂糖がたんと入ったお茶を吸つてたっぷりと飲んだ腹が、炎のゆらめきの中でヒツジやラクダを連れて自由に移動していた。地中に透き通っている。「この茶は私にも飲む権利がある」といわんばかりに、堂々と触覚を震わす様子に驚いた。瞬ひるんだが、ごめんよと爪で弾きとばして、残りの茶をいただきた。



ネゲブのベドウイン(1993年夏)

山中由里子
やまなか ゆりこ
民博民族文化研究部

専門は比較文学比較文化。アレクサン卓大王の死後に彼にまつわる様々な言説が、古代ギリシア・ローマ世界からイスラーム世界へのどのように伝わり、展開している。著書に『アラビア半島へ』(名古屋大学出版会) 2009年。